



| | |
|--------------|---|
| Title | 清末におけるジュール・ヴェルヌの受容 : 梁啓超訳『十五小豪傑』を中心に |
| Author(s) | 范, 苓 |
| Citation | 大阪大学言語文化学. 2000, 9, p. 49-62 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/78023 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

清末におけるジュール・ヴェルヌの受容

梁啓超訳『十五小豪傑』を中心に*

范 苓**

中国近代の翻译文学，受到日本明治文学界の很大影响。以日本译文为媒介翻译西洋文学，亦是当时的翻译界的主要倾向。伴随着西方文学的流入，继政治小说之后，西方的科学冒险小说被介绍到中国。

西方科学小说的传人，始于法国科学小说家儒勒·凡尔纳。1902年，梁启超据日本森田思轩的译本《十五少年》（博文馆1896年刊）将凡尔纳的冒险小说《十五小豪杰》译成中文，刊载在他主编的《新民丛报》第二号上。此后，凡尔纳的科学冒险小说作为新小说被大量译介过来，对中国文坛产生了深刻影响。而这些译文又大多译自于日本的重译。

一直热衷于政治小说译介的梁启超，转而将少年冒险文学作为译介对象，是基于他对科学小说教诲色彩的追求。其目的在于通过十五个少年在孤岛上与大自然搏斗的冒险故事，唤起民族的危机意识，激励中国人的活泼、进取、冒险精神。其次，梁其超最大的目的还在于通过少年们有组织的立宪行为，介绍西方文明，开国人眼界。他在译文中加了大量的尾评，论述独立、冒险、进取的意义，阐述西方文明的崇高思想，并重点地、辨证地介绍了译文中出现的具有新思想意义的新名词，以借鉴其思想意义，改造国民的旧意识。

因此，这部以启蒙为目的的翻译小说，也就具有了站在读者立场上进行内容取舍的特点。吸取对国民教育有利的部分，删除不合乎国情、于读者不利、或于情节无关的场面、背景描写。译文中任意增添译者感怀的评语之处也随处可见。尽管如此，与梁启超最先翻译的政治小说《佳人奇遇》相比，此篇并未对原作内容作大的改动，且基本

* 儒勒·凡尔纳的科学冒险小说在中国的翻译——谈梁启超翻译的《十五小豪杰》（范 苓）

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

忠实于森田思軒の译本。

《十五小豪杰》在中国问世后，以其清新的形式、生动的内容，引起了读者的共鸣，同时作为凡尔纳科学冒险小说移入中国的先驱作品，对之后的科学小说的介绍产生了很大的影响。

1. はじめに

清末において西洋文学が意識的に翻訳されるようになったのは、日清戦争後の反省と自覚に基づいて、梁啓超を中心とする有識者が新小説運動の提唱と実践を行なった頃であった。

1902年、梁啓超はジュール・ヴェルヌの原作『Deux Ans de Vacances』を森田思軒訳の『十五少年』から重訳し、『十五小豪杰』と題して、自分の主宰する『新民叢報』の第2号に連載した。同年11月には、彼の主宰する『新小説』第1号に、ヴェルヌの『海底旅行』の連載も始められた。その後、ヴェルヌの『鉄世界』、『月世界旅行』、『地底旅行』などの小説が続々と翻訳された。このようにして、西洋文学に対する概念がまだ明瞭でない受容初期に、中国には従来に見られなかったヴェルヌの科学冒険小説は、新小説¹⁾の一つとして導入された。

清末におけるヴェルヌものの流行は、日本で明治10年代から始まったヴェルヌの翻訳ブームの影響によるものであり、当時翻訳されたヴェルヌの小説は、殆ど日本語からの重訳であった。日本人に親しまれているヴェルヌの作品は、中国においても盛んに翻訳され、人々に読まれたのである。

梁啓超は政治思想家として、理論の提唱・翻訳の実践において、『佳人之奇遇』・『経国美談』など、日本の政治小説を懸命に翻訳・紹介していた。その彼が何故この少年向けの『十五少年』を翻訳の対象として選んだのか。梁訳の『十五小豪杰』は中国におけるヴェルヌの受容にどんな影響を及ぼしたのか。特に、日本語を経由して翻訳されたヴェルヌが中国ではどのように読み取られたのか、筆者にとって関心のある所である。

本稿では、梁啓超訳の『十五小豪杰』を森田訳の『十五少年』と対比しながら、

¹⁾ 梁啓超が小説界革命で提唱した新しい体裁、新しい思想、新しい内容を持つ新しいスタイルの小説のこと。

当時の文化背景において、梁啓超がヴェルヌを選んだ理由を考え、彼が中国の読者に対し、西洋のどのようなものを選び、どのように伝えたのかを考察する。

2. 『新民叢報』と冒険小説の翻訳

周知の通り、1898年、戊戌の政変の失敗後、梁啓超は日本に亡命した。1899年、彼は編集している『清議報』第10冊誌上に、「論学日本文之益(日本文を学ぶ利益を論ず)」を掲載し、日本文を通して西洋文明を受容することが今日中国の最大の急務であると主張した。また、同誌には、梁啓超が自らで翻訳した東海散士の政治小説『佳人之奇遇』と矢野龍溪の『経国美談』も連載した。特に梁訳の『佳人奇遇』の冒頭に収録された論説「訳印政治小説序」において、彼は欧州各国及び日本の変革の初期には、政治小説が大きな役割を果たしたと指摘し、中国の政治改良を促進するには、政治小説の力を借りるべきだと政治小説の翻訳を提唱した。これは、翻訳小説の重用性を明らかにした最初の論文であった。

1902年、梁啓超は横浜で『新民叢報』²⁾を創刊した。その第1号に、彼は「新民説」を発表し、その第2節の「新民は、今日中国の第一の急務を論ず」において、中国を救おうとすれば、「新民」(国民を新しくすること)をするしかないとして「新民」理論を提出した。更に、第20号まで展開された「新民説」において、梁啓超は中国の不振の原因を国民の「公德」、「国家思想」、「進取冒険の精神」、「權利思想」、「自由」、「自治」、「進歩」などの不足によるものだと指摘し、中国社会の変革には、まず民智を開くことが肝要だと強調したのである。

『新民叢報』時期に入って、梁啓超の国民性問題に対する関心は、彼の小説観にまで影響を及ぼし、単なる政治小説の礼賛から一歩進み、文学改良の意識にまで高められた。1902年、彼は中国最初の小説専門誌『新小説』を創刊し、その創刊号に「小説と群治(社会)との関係を論ず」という論文を発表した。この論文では、彼は小説を社会政治と結びつけ、中国社会の腐敗のすべての根源が伝統的な旧小説にあると批判して、「小説界革命」という文学改良のスローガンを掲げた。

一国の民を新しくしようとするならば、その国の小説を新しくせよ。(中略)何故なら、小説には人道を支配する不思議な力があるからだ。

²⁾ 1902年横浜で創刊され、前後6年半に渡って続けられた月2回の雑誌で、1908年8月第96号で廃刊された。

今日、社会を改良しようとするれば、必ず小説界革命から始めなければならない。民を新しくしようとするれば、必ず小説を新しくすることから始めなければならない³⁾。

梁啓超は誇張した表現を用いて、社会政治の変革に果たす小説の影響力を最大限に強調した。小説論の主旨は、明らかに社会政治の変革であり、最終的な目的は「新民」にあった。彼の文学思想の根幹は明らかに「文学救国」だと言える。この功利的な小説論が、近代中国の文学変革に与えた影響は非常に大きい。梁啓超の呼び掛けにより、近代中国では、西洋文学の翻訳からスタートした小説界革命が行われたのである。

西洋新思想の受容と国民の政治啓蒙を自らの文学活動の目的とした梁啓超は、伝統文学改革の希望を西洋文学の翻訳に託した。彼は「著書、訳書の目的は、国民に文明思想を伝えるためである」⁴⁾と自身の翻訳態度を表明し、西洋の翻訳小説を新小説の手本として懸命に翻訳・紹介した。『新民叢報』と『新小説』の二誌が、彼が西洋文化の紹介、旧文学の批判、「新民」を鼓舞する重要な陣地となったことは言うまでもない。翻訳内容も『清議報』のように政治小説に限らず、「冒險小説」「科学小説」「探偵小説」などの様々な新しいジャンルの翻訳作品が紹介された。それらの中で、最も早く『新民叢報』に掲載された冒險小説が、梁啓超訳の『十五小豪傑』であった。

3. 『十五小豪傑』の翻訳意図

梁啓超訳の『十五小豪傑』は『新民叢報』第2号から18回に分けて連載された。第9回までは、梁が「少年中国之少年」というペンネームで翻訳し、第10回以降は披髮生⁵⁾に引き継がれた。

『十五小豪傑』は世に出た後、読者の注目を大いに集め、当時の中国人に一種の清新な感じを与えた。公奴は『金陵賣書記』⁶⁾の中で、次のように述べている。

小説は売れない(中略)読者は小説に感動しない。しかし、今日、新小説界の中

³⁾ 梁啓超 1902「論小説与群治之關係」『新小説』第1号、1頁。

⁴⁾ 「紹介新著・原富」1902『新民叢報』第1号、未署名、実は梁啓超である。

⁵⁾ 「披髮生」は羅普の筆名で、字が孝高。梁啓超と同じく康有為の萬木草堂時代の門下生である。1897年に日本へ留学し、梁啓超と共に「和文漢讀法」を著した。

⁶⁾ 公奴 1902『金陵賣書記』開明書店。

で、『黒奴吁天録』⁷⁾や、『新民叢報』の『十五小豪傑』のような小説ならば、必ず売れると保証する。

『十五小豪傑』は内容の面白さと題材の新鮮さで、当時の新小説界に受け入れられ、かなりの人気を博した。小説が上梓されてから版を重ね、1930年までには、上海書局で第5版までが印刷された⁸⁾。更に注目すべきは『十五小豪傑』が当時の代表的な翻訳として、文学青年に広範な影響を及ぼしたということである。周作人は「私が国文を学ぶ経験」において、次のように述べている。

私達が暇潰しに読む小説がなくて、無味乾燥な日々を耐えていた頃、翻訳界が賑わうようになって来た。嚴復訳の『天演論』・林琴南訳の『茶花女遺事』・梁任公訳の『十五小豪傑』は、当時において3つの代表的な翻訳もので、国語の時間には殆どこればかりを読んでいたのである⁹⁾。

魯迅も梁啓超の愛読者で、彼が『『月世界旅行』を翻訳したのも恐らくはこの影響を受けたからだろう』¹⁰⁾と周作人が証言している。

それでは、梁啓超が、なぜこの少年冒険物語を翻訳の対象として選んだのだろうか。この小説は梁の新民の理念と如何に結びついていくのか。まず彼の翻訳の意図を検証していく。

社会の改革及び国民の教育を文学の目的とした梁啓超は、翻訳ものの選択においても、政治宣伝に有益であるか否かを基準にしたであろうと推測される。『十五少年』は一つの少年文学である。しかし、その中に盛り込まれた進歩的思想内容が、むしろ国民全体に向けられたものとして、梁の関心を引き付けたのである。『十五小豪傑』の第4回までの各回末尾に附している解説からは、彼が小説から受けた感銘と作品の意義が窺える。

その中では、次のように述べている。

主人公の武安は第2回で「今日は我らが最も危険な時だ。もし、同じ場所にいれば互いに救われる。もし互いに離れば即ち滅亡への道だ」と言ったが、我が同胞はこの言葉を毎日くり返し言うべきだ。(第2回の解説)

ここからも、分かるように、小説に描かれた孤島に漂着した少年たちの危険な

⁷⁾ 林琴南訳、ストウ夫人の『アンクルトムス・ケビン』。

⁸⁾ 郭延礼 1997に拠ると、梁啓超訳の他に、1913年に、世界書局が出版された遠生訳『十五少年』、1940年施落英訳『十五小豪傑』、1947年章士俊訳『十五小英雄』もある。『中国近代翻訳文学概論』湖北教育出版社、222頁。

⁹⁾ 周作人 1926「我学国文的経験」『談虎集』三育図書文具公司、404頁。

¹⁰⁾ 山田敬三 1977、「旧日記中の魯迅」『魯迅の世界』45頁参照。

状況は、外国侵略による民族危機に陥っている中国人の苦痛の状況に相似しており、少年たちが団結して勇敢に自然と戦うという英雄的な精神は、梁の関心を刺激するものであった。憂国、救国の志を持っている梁啓超が、この冒険小説の感化力を借りて、民族の危機意識を喚起しながら、英雄の気概を伝えたいと意図したことは容易に推察される。

また、中国人に崇高な理想を語り、西洋文明を以って国民を改造しようということは、梁啓超が翻訳に携った最も大きな理由だと考えられる。次の解説を挙げてみよう。

学生たちは休暇中に、他の遊びをせず、却って航海の念を起す。このことから、西洋少年の活発・進取の気概が分かる。(第2回の解説)

このように、梁啓超はこの小説に西洋文化の長所をみたのである。中国の衰退は、文明進歩の遅れに原因があると考えた梁啓超は、この時期の「新民説」において、西洋文化の価値について数多く論じている。特に『十五小豪傑』の翻訳と同時期に、彼は「新民説五」の「論進取冒険」¹¹⁾において、中国における冒険精神の欠如を指摘している。

今日世界の各国の中で、我が中国ほど後退のスピードが速く、また極めて危険である国はないのだ。この為、わたしは、非常に恐れている。欧州民族が中国より強いのは、色々な原因があるが、その進取冒険の精神に富むことが最大の理由である。

西洋と比較して中国の進歩しない理由を梁啓超は、冒険、進取精神の不足に求める。したがって、彼は少年文学そのものを鑑賞するより、むしろこの小説を通して、西洋の精神を吸収し、自国民の弱点を反省させ、これを以って、中国人の冒険進取精神の養成と英雄の出現を期待していたのである。『十五少年』という題名を『十五小豪傑』に変えたことだけでも、この小説を一つの英雄物語として紹介して、国民の活発・進取の精神を鼓舞しようとする梁の意図が窺えるのである。

森田思軒訳の『十五少年』は、少年文学の傑作として日本人の読者に受け止められた。一方、梁啓超は『十五小豪傑』を、一つの啓蒙的な政治小説として翻訳したのである。

¹¹⁾ 梁啓超 1902「新民説五」『新民叢報』第5号、1頁。

4. 『十五小豪傑』の内容選択

梁啓超訳『十五小豪傑』の拠った底本は、森田思軒が明治29年に翻訳した『十五少年』¹²⁾である。彼は第1回の解説で、原作を明らかにし、『十五小豪傑』が3度の重訳であることを、次のように記している。

この本はフランス人の焦士威爾奴(ジュール・ヴェルヌ)の原作で、原名は『二年間の夏休み』という。英国人によって、これが英語に訳された。日本の大文学者森田思軒がこの英訳を『十五少年』という題名で日本語に訳した。この訳は日本語からの重訳である¹³⁾。

西洋のものを自由に翻案した当時は、「大多数の翻訳者は、原作の名前をはっきり注記しない。又、勝手に原作の人名、地名を変え、自分の著作とする場合も多」¹⁴⁾かった。『十五小豪傑』のように原作と原作者及び翻訳の底本とする日本語訳を明示する翻訳ものは極めて稀だったのである。更に、自分の翻訳方法についても、梁啓超は率直に次のように説明している。

英訳自序では、英文の体裁を用いてはいるが、達意を主とし修辞を従としているので、原作となら差が無い自信があるという。又日本の森田氏も、日本風に訳したが、原作の意図は絶対に損なわないと言った。今日、私は全て中国の説部(章回)体裁でこれを訳す。しかし、絶対森田に負けない自信がある。(第1回の解説)

このように、翻訳の形式に於いて、梁啓超は、意識的に中国の伝統的な章回小説¹⁵⁾の体裁を以って訳したことを明記している。また、30章からなる原作を森田は15回に圧縮したが、梁はそれを、改めて18回に分割したのである。このような意識を主とする翻訳の仕方は、森田訳からもある程度影響を受けた結果だと考えられ、近代中国翻訳初期の一つの典型であろうと思われる。しかし、このよ

¹²⁾ 明治29年『少年世界』第2巻第5号から19号にかけて連載したものが同年に博文館より単行本として刊行された。

¹³⁾ 阿英の『晚清劇曲小説目』に拠ると、『十五小豪傑』の依拠した底本は1896年森田思軒訳の『十五少年』(博文館)である。

¹⁴⁾ 鄭振鐸「林琴南先生」『鄭振鐸文集』第六卷 1988 人民文学出版社、357頁。

¹⁵⁾ 「旧章回体小説」の特徴について、沈雁冰は「自然主義と中国の現代小説」で次のように纏めている「毎回の字数は必ず大体同じぐらいで、対句になった回目(標題)を入れたり、毎回の巻首を「話説(ところで)」「却説(さて)」等の文字で始め、毎回の結尾を「要知後事如何、且聽下回分解(その後を知りたいならば、次の回をご覧ください)」のような文字と二句の詩で結ぶ手法である。

うな翻訳様式の選択と回数の変更も、訳者が当時の読者の伝統的な鑑賞の興味に合わせ、翻訳ものと読者の距離を可能な限り短縮しようと図ったからである。

翻訳の文体に関しては、中国の読者の西洋理解を向上させるために、梁啓超は、森田訳の文語体をなるべく口語や口語混じりの平易な文語に置き換え、かなりの苦心をして彼独自の新文体を作り出した。

一般に、梁啓超訳の『十五小豪傑』は、原作を忠実に反映した翻訳ではないと言われている。何故なら、『十五小豪傑』は3度の重訳であり、しかも、英語訳も、日本語訳も、筋の運びを中心とする抄訳だからである。ただ、梁啓超訳を、その底本となった森田訳と対照してみると、『十五小豪傑』は、梁訳の『佳人奇遇』のように、内容的に大きな改変¹⁶⁾は見られず、森田訳の主な筋と主な場面は殆ど訳出されていると考えられる。但し、国民を教育する目的で翻訳された『十五小豪傑』は、翻訳内容の選択においては、意識的に森田訳の一部を削除・修正したり、加筆したりしている箇所がしばしば見受けられ、訳者の創作小説に劣らぬ創意工夫も窺える。

(1) 削除・修正の特徴

梁啓超が意識的に削除している点を例示しよう。

森田訳における削除の問題については、波多野完治は、フランスの少年とイギリスの少年の気質についての描写や説明を省略していると指摘¹⁷⁾している。

例えば、森田訳の第6回では、宿題を拒むドールに、ゴードンが体調を科す場面と、イギリスの少年が鞭を進んで受けるのに、フランスの少年はそれを恥とするという説明の一切が省略されている。波多野によると「日本人にとっては、イギリス人もフランス人もありません。少年たちが無人島に共和国を建設するという話の筋だけで、日本の少年の空想力を開発するのに十分なので」ある。

梁啓超訳は、森田訳の意識的省略を、更に進めていると考えられる傾向がみられる。森田訳第2回では、「英国の寄宿学校の風は甚く佛国等に異なり」となっているが、この箇所当たる梁啓超訳の第3回では「佛国」が削られ、代わりに「別

¹⁶⁾ 中村忠行は、梁訳の『佳人奇遇』について、「訳者の思想と相容れぬ個所には大胆な斧鉞を加え、ことに巻末に於て東海散士が得意の辯を振う朝鮮問題の個所になると全く改竄され、「朝鮮者。原為中国之属土也云々」という三百字ばかりの独善的な文字を以て、突然終わってしまう」と指摘した。「政治小説に於ける比較と交流」1953『文学』岩波書店 第21巻第9期、907頁参照。

¹⁷⁾ 『十五少年漂流記』波多野完治訳 新潮文庫 1951年解説を参照。

国」と訳されている。また、森田訳の「佛国等に罕れに見る所の奉上勤務の念に厚きの特色あり」の下線部分も、梁啓超は削除している。つまり、原作者であるフランス人の立場から見たイギリス人の悪い所についての説明、及び、イギリス人に対する好ましくない感情は、梁啓超によって、更に、翻訳の対象から外されているのである。

このような削除は、意識的なものだと考えられる。恐らく訳者が、イギリス人とフランス人の気質の異なる部分を強調すると、西洋の近代文明を紹介する効果が薄れ、中国の読者を混乱させる恐れがあると考え、削除の処置を行なったのである。

梁啓超は明治日本の影響で、イギリスを世界の文明開化の手本として、イギリス人に親しい感情をもっていたと考えられる。この翻訳において、イギリス少年の欠点を訳出することを故意に避け、反対に、かなりの情熱を以て賛美している。例えば、立憲政体におけるイギリス学校の生徒の「自由」・「服従」精神、「自助自治」習慣及び「権利」と「義務」等の特徴を紹介する箇所、梁訳はすべて傍点を付け、読者に深い印象を与えようとした。更に、末尾の解説で、中国人にとって、まだ馴染みのないこれらの西洋政治思想について、自らの理解を加えて説明をしている。

英国人は自由を最も貴ぶ。(中略)自由と服従は車の両輪、鳥の両羽の如く、相反しながら、お互いを成り立たせ合うのである。立憲政体の国民はこの二つの性質の一つも欠かせない。英国人がこの世界を独歩するのは、すべてその故である。しかし、最近の若者たちは、自由、平等の理論をちょっと耳にして、すぐ放埒無規律になる。それは本当の自由ではないだろう。(中略)

英国人の各団体は、大きくとも小さくとも、すべて自治を採用している。学校も国と同じく、年長者と幼年者は、即ち治者と被治者の両階級にあたる。年長者はサービスをもらう権利がある一方で、幼年者を保護する義務もある。権利と義務は明確に分けられ、学校を出て国に奉仕するのも同じことである。(第3回の解説)

このように、梁啓超は立憲政治に対する礼讃だけでなく、「自由」・「権利」といった新思想を表す新語句について弁証法的に論じ、「自由」と「服従」というように、権利を有すると同時に同等の義務を有すべきことを強調している。また、自由や権利を主張しながら、義務は履行しないという中国における自由に対する理解の偏り、及びそれによる規律の無さを痛烈に批判した。

次に、原作の内容を意識して削除している箇所は、作品に特有の風景や自然に対する描写と西洋人の宗教的な慣習である。

具体的な特徴を見るために、梁訳を森田訳及びフランス語からの完訳と対照してみよう。

以下は、森田訳の第3回の末尾の部分とそれに対応する完訳である。

日没前には天全く霽れて、蒼穹復た一點の雲無く、夜に入りては南半球の群星宿燦然として各光を放つ中に就て一きは目を惹くは、特に南極地方に於いてのみ仰ぐことを得る南方十字星なり、吳教等諸童子は、明日發足せむとする四名の遠征委員の前途の身のうへを氣づかひて、一同悵然たるをりから、不圖首を挙げて是等の群星宿を仰ぎ見たるときは、皆な忽ち其の父母の事故郷の事を憶ひ起して、幼年者等は皆な宛がら寺院の十字架の前に跪拜する如く、南方十字星の前に跪拜して、前途の好運を禱りたり。(森田訳 第3回)

すでに日没前には、雲が西のほうに消えてしまっていた。西を見ると、まるみがかった水平線がくっきりと見えていた。大空には、南半球の美しい星座がまたたいていた。その中には、天空の南端に輝く、あのすばらしい南十字星があった。

ゴードンたちは、明日の別れを思うと、悲しくなった。この危険な探検で、いったいどんなことが起こるだろうか。大空を仰ぎながら、みんなは、両親や、兄弟や、国のことを考えた。もう二度と会えないのではなかるうか。

こんなことを考えながら、小さい少年たちは、礼拝堂の十字架の前にひざまずくように、南十字星に向かって跪いた。(『二年間の休暇』朝倉剛訳 第6章)

梁啓超訳の第5回に当るこの段落は「……」のみになっており、すべての描写が削除されている。

ここでまず注目したいのは、森田訳がこの箇所で抄訳を行いながら、視覚的な情景と子供の心理を簡潔に表現していることである。但し「礼拝堂」を「寺院」と訳すことで、明らかに西洋の宗教的なものを日本的に解釈して改訳している。

梁啓超は無意識にこの箇所を脱漏したとは考えにくく、「……」の省略記号から見て、むしろ意識的に削除したと考えられる。勇敢な少年英雄を中国の読者に見せるために、できるだけ少年たちの心理的に弱い部分、また東洋人の習慣とは異なる西洋人の宗教に対する慣習は紹介しない方がよいと判断して、これらの情景描写、子供たちの性格描写、心理描写を意識的に削除したのだと考えられる。結果的に、風景と子供たちの性格を表す描写は消えている。『十五小豪傑』のよ

うに、啓蒙の目的から翻訳された西洋小説は、ほとんど内容本位で、原作の特有の文学表現は無視され、描写されていない。これは、中国における翻訳の初期に、訳者たちが、純文学として翻訳を行なったのではないことを示唆している。

同じような省略は、ある意味で、東西の文化的差異によるものである。典型的な例を挙げて見よう。

森田訳の第6回の「曆に據るに七月十五日は正に聖スキジン日に當れり」という箇所は、梁訳では省略されている。これは梁啓超自身が、キリスト教の習慣について詳しくないためか、若しくは、読者に対して紹介する必要がないと判断したため、この種の叙述を飛ばしたのであろう。

原作に忠実であるより、国民を啓蒙する立場に立って、翻訳内容の取捨を判断したことは、梁啓超の翻訳の特徴である。国民教育に有益な部分を積極的に採り、読者に対しては必要ではないと思う箇所を大胆に削除する。『十五小豪傑』の翻訳内容の選択からも、西洋文化の長所を採り、自民族の欠点を是正しようとする梁啓超の政治家としての姿勢が窺える。

(2) 加筆と修正の特徴

『十五小豪傑』に顕著な加筆は、まず冒頭に森田訳に見られない「調寄摸魚兒」という韻文詞¹⁸⁾である。

調寄摸魚兒

莽重洋驚濤橫雨。一葉破帆漂渡。入死出生人十五。都是鬢齡乳稚。逢生處。更墮向天涯絕島無歸路。停辛拚苦。但抖擻精神。斬除荆棘。容我兩年住。英雄業豈有天公能妒。植民儼闢新土。赫赫國旗輝南極。好箇共和制度天不負。看馬角烏頭秦凱同歸去。我非妄語。勸年少同胞。聽鷄起舞休把此生誤。

(大意：逆巻く大波と暴雨の大海に、一そうのぼろ船が漂っている。生死の間をさまよう十五人は、まだ幼児の面影を残した少年。生き残っても、はるか海の孤島であり、帰るにもう道は無い。苦勞を堪え忍び、元氣を奮い起こし、イバラの藪を取り除いて二年ほど身を置く。雄々しい行動がまさかお天道さまに妬まれるはずあるまい。新たなる開拓地を開き、国旗が南極に輝く。素晴らしい共和制度が世界に広まる。凱歌を奏して皆一緒に帰る。これは真実の物語。少年同胞よ、時に応じて、人生を無駄にはいけない。)

¹⁸⁾ 楽府から変化した一種の詞曲で、一定の譜に基づき、それに合致した声韻平仄の字を填入して韻文を作る。

この詞は氣勢雄大の筆致で、少年たちの英雄的、冒険的な精神を謡っている。「精神」「英雄」「国旗」「共和」「制度」等の新しい語句が多く使われているため、読者に新鮮さを感じさせる。最後の一句からは、意気込みと情熱を以って、態度鮮明に国民の覚醒を呼びかけている梁啓超の啓蒙家としての風貌が窺われる。このような創作に相当する加筆は、各回の末尾の全体の内容を概括している四句四行の詩も同じで、いずれも梁啓超の政治的意図に基づく加筆である。

もう一つの加筆には、訳文に記者の評論的な言葉を直接に加える特徴がみられる。

例えば、第1回に、少年たちの乗っている船は海上で嵐に巻き込まれ、後櫓はすでに吹き折られ、前櫓も吹き倒される危機に直面している箇所の森田訳と梁啓超訳を挙げてみよう。

森田訳 若し前櫓にして一たび倒れむには、船は坐ながら風濤の恣まゝに弄そぶ所に任して、童子等は手を束ねて、覆没を待つの外、復たせむすべ無かるべし。

梁訳 若使連前櫓都沒了呢。那時這船可不成了箇沒自由權的奴隸。任由風濤怎麼簸弄嗎。這孩子們可不是除了束手待斃之外。更沒別的法兒嗎。
(もし前櫓までもなくなったら、この船は自由権のない奴隸になるように、風浪の揺れ動きに翻弄されるであろう。子供たちは手をこまねき、死を待つほか方法がないであろう。)

森田訳は何の評語も加えず、極めて自然な叙述である。一方、梁啓超は、森田訳にない下線部の評論的な一節「この船は自由権のない奴隸になるように」を付け加えている。このように原作の表現に手を加えて誇張することは梁訳の特徴として、全篇にわたってみられるものであり、明らかに話題を借りて民衆の亡国の危機意識を喚起しようとする梁啓超の憂国、愛国の感情の発露である。

梁啓超だけではなく、清末には「自由」という日本からの訳語は、新しいイメージと政治理念を持つ用語として単独で多く使われるだけでなく、「奴隸」という語と結びつけて使用するのが目立った¹⁹⁾のである。中国の弱体化は「奴隸根性」に起因していると愛国の知識人は考え、強烈な反侵略の感情から、国民の覚醒を呼号し、民族の奮起を鼓舞していたのである。『十五小豪傑』では、森田訳にある新しい思想を表す二字新訳語を積極的に取り入れているのが、一つの特徴

¹⁹⁾ 許常安 1960「晚清「詩界革命」詩の用語について」『斯文』第44号、19頁を参照。

である。これは、訳者の西洋政治思想に対する積極的受容の姿勢を示唆している。しかし、政治的な評語が小説に多く使われているためであろうか、錢鍾書が「私は梁啓超訳の『十五小豪傑』、周桂笙訳の探偵小説などを読んで、やはり重苦しく、無味乾燥だと感じる。」²⁰⁾と評しているのである。

第三に、西洋の風俗、人情、制度などに関っている箇所、そのままでは中国の読者に分かりにくいと思われる点には、訳者が「評して曰く」として補足説明の言葉を挟んでいる。

例えば、梁訳第3回では、英国学校の低学年生を紹介するところで、森田訳は「尚その親たちの頬に接吻するを以て禮となす」とのみ記述しているものを、梁訳は、「第一級第二級の尚係和他父母接額為禮的小孩(第一級と二級生は、まだその両親と額を接して礼とする子供である)」と訳した。その上「西人十歳以下童子見所親者皆接額為禮(西洋人の十歳以下の子供は親と会うと、皆額を接するを以て礼とする)」を補充しているばかりか、「接吻」を「接額」に改訳している。訳者は、中国にはこのような慣習がなく、西洋の礼儀を受入れにくいと配慮して、意図的に修正したものと考えられる。

以上のように、訳者が作為的に行なった削除、加筆、附加、修正などが『十五小豪傑』では頻繁に見られる。いずれも訳者が国民に対する政治的宣伝効果を狙った演出だと考えられる。

5. 結び

このように、本研究は森田訳と梁啓超訳を対照しながら、梁啓超の『十五小豪傑』の翻訳の姿勢と特徴について考察を行なった。西洋文学の受容初期に、明治日本の翻訳の影響のもと、ヴェルヌの冒険科学小説は、民衆の啓蒙教育に役立つものとして、内容と表現の新鮮さで、中国人に受け入れられた。翻訳内容の選択を検証することで、梁啓超が民族の奮起を切望する強烈なナショナリズムを持って、西洋文化を中国に導入しようとしたことが明らかになった。文学そのものとしてより、一つの教化的道具として訳されたこの作品には、様々な翻訳上の問題がある。しかし、その小説の清新さ、物語の面白さ及び梁啓超の独特な新文体で訳されたことにより、中国の読者の共感を生んだ。更に、ヴェルヌの科学小説の翻訳ブームを引き起こした先駆的な作品として、中国文壇に西洋文化の清新な空気を吹き込み大きな影響を与えたと言えよう。

使用テキスト

『十五少年』 森田思軒訳 1977 『明治少年文学集』 筑摩書房。

『十五小豪傑』 梁啓超訳、披髮生続訳 1902年『新民叢報』第2号から第24号にかけての連載、新民社。

『二年間の休暇』 朝倉剛訳 1981年 福音館書店。

参考文献

川戸道昭 榊原貴教 1996 『明治翻訳文学全集・ヴェルヌ集』 大空社。

富田仁 1984 『ジュール・ヴェルヌと日本』 花林書房。

柳田泉 1961 『明治初期翻訳文学の研究』 春秋社。

私市保彦 1994 「日本の〈ロビンソナード〉 思軒訳「十五少年」の周辺」『近代日本の翻訳文化』 中央公論社。

阿英 1979 『晚清小説史』 飯塚朗、中野美代子訳、平凡社。

陳平原 1989 『二十世紀中国小説史』 北京大学出版社。

夏晔虹 1991 『覚世与伝世 — 梁啓超の文学道路』 上海人民出版社。